九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中島広足往来抄(七)

白石, 良夫
文部省教科書調査官

https://doi.org/10.15017/10463

出版情報：文獻探究. 16, pp.48-52, 1985-09-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

中島広足往来抄(七)

白石良夫

〔四十(承前)〕楢林公足・猪股久蔭・西紀麿・近藤光輔・岡部春平・みす子・渋江加津麿・名村某・彭城秋平・陸品三・柘植蔭夏・西村気風・伊奈御楯・青木永章・栄福寺・若杉某・井上清麿・大津山某・いとにや・中島広行・松本富久・来照寺

17 楢林公足・猪股久蔭・西紀麿・近藤光輔・岡部春平・みす子

十八日、公足・久蔭にともなはれて、うち〳〵蘭館〔あかえみしのやどれる家〕を見に行。（九オ）

以下、オランダ屋敷の様子を記す。「其国の筆とれる司」の部屋にて談笑したあと、役人の詰所に寄る。

さぶらひ所めく所にいたれば、紀まろ、けふのあづかりにてゐたり。こゝに人〳〵も来あひてしばしやすらひ、ひるのかれいひなどくらふ。さて、かへりぢ〔さ〕に近藤光輔がりとふ。此人はこゝに名高き歌人なるを、此ごろ筑前のくにゝ行しに〔て〕、きのふかへりしとせ、をりしも家にありて〔酒肴てうじすゝめて〕、さま〴〵の物語す。（中略）あすの夕さり春平がもとにて歌よまんとて契る。かへさに、みす子がり立よりて其事をつぐ。（九オ〜九ウ）

「久蔭」は猪股久蔭。オランダ通詞。文政六年、オランダ詩を広足に訳させたことで著名。近藤光輔とはこの日、初対面である。本誌第四号〔三〕22参照。

18 みす子・近藤光輔

十九日、わりなきさはり出来て、けふのまとゐにまゐれり〔かへぬ〕。其よし、みす子がり行てつぐる。ついでやがて物語して酒などたうぶ。（中略）夕つかた、光輔がり行て、けふのさはりのことつげ〔いひ〕て、やがてきのふの名残の歌物語しつきぬるに、おもしろくをかしき事かぎりなし。（中略）此人、歌のおもふきを得たる事、かねてきゝしにも、いとまさりり。（後略）（九ウ〜一〇オ）

19 渋江加津麿・楢林公足

廿日、あるじ加津まろのあつらへにてのりとごとを書。また、公足が家のこへるによりて、栁屋の記をかく。（一〇オ）

「栁屋」は公足の家の号。

20 楢林公足・名村某

廿一日、ひるのほど、公足来れり。日入がたより名村某をとひて、うちつれて某の楼にのぼりて、よふくるまであそびぬ。（一〇オ）

「名村某」、未詳。

21 楢林公足・彭城秋平・岡部春平・名村某・陸品三

廿二日、公足がり行つるに、秋平来りぬ。やがてともなはれて、から人のやどれる家見に行。こもおなじくうち〳〵秋平がはからひによれる也。（中略）陸品三とかいへるくすしの手をかく人のざうしにいたりて見るに、其かける物を二ひら三ひらおこ

せぬ。（中略）かくて、かへさの道より春平に行あひて、名村某のもとに日ぐれがたまであそびてかへる。こよひは、何がし法師のもとにて『古今集』春平講ずべきよなれば、（後略）

（一〇オ～一〇ウ）

陸品三、未詳。

22 楢林公足・名村某

廿三日、例の公足とひて、くれつかたより名村某に行て物語す。かへさに公足がり立よりつるに、こよひはねまちとかいひて、人〳〵なほおきぬたり。さま〴〵の物語にあかつきちかうなりぬれば、やがて其家にやどりぬ。

（一一オ）

23 楢林公足・名村某・柘植蔭夏

廿四日、猶此家にありてものがたりす。よべ名村某に契り置つれば、ほとりの寺〳〵見ありかんとて春平をまつに、くるゝまできたら〔こ〕ず。さらば二人にてものせんとて、うちつれて出しかど、道に柘植某がり立よりし〔つる〕に、をりしも茶といふものゝまとねとかいひて、人〳〵つどひゐたり。おのれはこのまぬわざなれば、ことかたにゐたるに酒すゝむれば、こゝろゆくばかりのみて、公足がり行てやどりぬ。（後略）（一一オ）

「柘植某」は、翌年の『後夢路日記』などにしばしば名前の出てくる柘植蔭夏であろうが、伝未詳。

24 楢林公足・西村気風・岡部春平・伊奈御楯

廿五日、猶、公足が家にありて。気風なども来りぬ。夕つかた此家とじの母なる人ことかたより来ゐたるにこはれて、『源氏物語』の花宴巻を解ぬ。こよひは春平が家にて何がしの家とじむすめなどあまたつどひてことひくことありといへば、かへりぬ。男女（ヲトコヲミナ）いと多くつどひ来り、御楯神主・公足・気風なども来ぬ。（後略）

（一一ウ）

25 楢林公足・西村気風

廿六日、ひるつかたより公足がりゆきて、ものがたりす。この公足の家で夕食に豚料理を出され、その脂濃さに広足は閉口している。

こよひも若紫の巻をときぬ。気風とて一人来ぬ。やがて其家にやどりぬ〔る〕。

（一二オ）

26 岡部春平・近藤光輔

廿七日、書ども取いでゝよむ。夕つかた春平がりかへりぬ〔る〕。此よは、光輔来りて歌よむ。かねて題三をまうけぬ。（一二オ）この夜の兼題は「浦時雨」「閑庭霜」「寄水恋」。当座の題は「屋上霰」「池水鳥」。広足はそれぞれ二首づつ詠む。

27 楢林公足・西紀麿

廿八日、公足がり行て、物語す〔例の〕『源氏物語』よむ。紀まろなどもきぬ。

（一三ウ）

28 伊奈御楯・青木永章・みす子・柘植蔭夏・近藤光輔・楢林公足・崇福寺

廿九日、松のもり伊奈御楯がりいたりて物語す。又、青木丹波守がりいたる。夕つかた〔又〕みす子がりいたりて酒たうぶ。柘植某・近藤光輔もきたる。夕つかた崇福寺にあなる大釜を見に行。（中略）さて、公足がりかへりぬるに、こよひは江戸と出雲と二人のくすしの、こゝにきゐたるが、ちかき日に立かへる。うまのはなむけにとてあるじより酒すゝめらるゝ日〔よ〕なれば、おのれも其むしろにつらなりて物語す〔しつ〕。

（一四オ）

29 伊奈御楯・近藤光輔・岡部春平・若杉某

霜月朔日、夕つかたは松のもりにてわかれの酒たうぶ。おのれ三かの日にかへらんとのあらましなればぜ。（中略）此夜は若

杉某のもとにて光輔・春平つどひて歌よむ。（後略）（一四ウ）

「松のもり」とは御楯が神主をしていた松森神社である。

30 楢林公足・近藤光輔・岡部春平・名村某

二日、公足来る（とひて）、夕つかたは光輔がり行て、春平とゝもに歌よむ。（中略）歌ども講じはてゝ後、春平がとぐむべきよしのなければ、かきくらす。（中略）此よは名村某の家にいたりてやどる。（一四ウ～一五オ）

31 名村某・楢林公足・岡部春平

三日、朝とく名村が家をいでゝ公足がり行。けふは出つらん（出たらん）と定め置つる日なれど、雨ふればとゞまりぬ。夕つかたは春平が家にいたりて、やがてやどる。（後略）（一五オ）

32 楢林公足・岡部春平

四日、雪かきたれふれば、けふも出たらず。公足とひ来て物語す。かたみに歌よむ（ろついでに）、春平が、「まさきくてかへりばや、ことまつおやのみこゝろおもへばとめんすべなし」といへるに、

とゞむめる心ふかさはしれゝどもまつらんおやそ（も）かつは（そ）恋しき

春平・公足にいふ（ひかけぬ）

かたむろのつなねのたゝずとひもこんならのはやしのかげをとめつゝ

春平が家の名をつなねのかたむろといへばなりひ、公足が氏を楢林といへればなり。（後略）（一五ウ）

33 近藤光輔・井上清麿・大津山某・猪股久隆・楢林公足・岡部春平・いとにや

翌五日は薄日もさしはじめたので、昼ごろ思いきって出立することに決める。人々来りてわかれをしむ。光輔・清まろ・大津山某・久隆等也。公足・春平はおくりせんとて、ともに出たつ。（中略）日入ぬるほどに矢上のすくにつきぬ。公足があないにて、いとにやといふにやどる。此よ歌よみかはす。（後略）（一六オ～一六ウ）

「大津山某」「いとにや」、未詳。

34 楢林公足・岡部春平・中島広行

六日、朝とくいでたつ。公足・春平、宿はづれなるかはらまでおくり来る。（一六ウ）

二人に別れて、島原に向って多比良まで行く。

なほたづぬて平村の植木神主がりいたる。あるじはあらねど、妻なる人いでゝねもころにあるじす。（中略）あるじもかへり来てさまざまの物語す。（後略）（一八オ～一八ウ）

「植木神主」はのちの中島広行。この度の長崎行きの往路にも立寄ったことは既述。

35 中島広行・松本富久

あくる七日は熊本への船出であるが、折悪く船便がなかった。広行の奔走にて、長洲から来ている釣舟が明日出発というのを聞いて、便乗してもらうことになる。

とかくするほど松本富久来りぬ。此人は、先つとし今は吾国高瀬のさとにすみてはやくよりしれる人なるを、近きころはまた故郷にかへりゐたる。おのれが来つるよし、神主せうそこしつれば、とひきたる（つる）也。（一九ウ）

36 来照寺

翌八日の午まえ長洲に着く。そこから熊本めざして行くのであるが、途中にて日暮れとなる。

日入かたになりにければ、よるの山路はいとゝまどひぬべくやとて、橘のさとなる来照寺にやどりぬ。（後略）（二一オ）

翌日の昼ごろ、我家に帰る。

紀行本文は十一月九日「家につきぬ」で終るのであるが、そのあと四丁ほどを、「此日記に書もらし」た歌文を記す。

【索引】

ア
青木永古 〔四十〕12
青木永章 〔二〕〔四十一〕12 28
あかしや 〔四十〕6 7
秋田殖吉 〔三十六〕
阿蘇惟馨 〔二十一〕〔二十一〕
阿蘇惟敦 〔二十一〕
細田屋 〔四十〕2
イ
池千別 〔三〕39
石川執 〔三十三〕
井芹某 〔三〕15
伊藤常香 〔四十〕13 16
いとにや 〔四十〕33
伊奈御楯 〔四十〕8 13 24 28 29
井上清麿 〔四十〕9 33
猪股久蔭 〔四十〕17 33
芋栗園 〔三〕11
ウ
上野光考 〔三〕32
内海真道 〔三〕27
エ
衛藤若蔵 〔四十〕13
衛藤蟠谷 〔二十一〕
オ
大石真麿 〔三〕26 33
大津山某 〔四十〕33
岡部春平 〔三〕22 23 37 44 〔四十〕1 5 6 15 16 17 21 24 26 29 30 31 32 33 34
岡松某 〔三〕8
小川某 〔四十〕13
カ
河上健雄 〔三〕3 46
キ
祇園社 〔四十〕13
北島清之助 〔三〕45
木山直秋 〔三〕2
コ
近藤光輔 〔三〕22 40 〔四十〕17 18 26 28 29 30 33
サ
斎藤彦麿 〔二十五〕
彭城秋平 〔四十〕6 9 10 21
坂本秋郷 〔二十八〕
佐佐木弘綱 〔三十五〕〔三十六〕
シ
汝江加津麿 〔四十〕5 19
浄土寺 〔三〕16
聖福寺 〔四十〕6
浄妙院某法師 〔三〕13
深宗寺 〔四十〕5
ス
杉谷行直 〔二十一〕
するがや 〔四十〕13
セ
清家堅庭 〔三十八〕〔三十九〕
清水寺 〔四十〕13
ソ
崇福寺 〔四十〕28
タ
高岡某 〔三〕38
高本紫溪 〔三〕7
竹林某 〔三〕17
チ
知足寺 〔三〕9

ツ 柘植蘆夏 〔四十〕23 28
ト 吐月亭 〔三〕20 31
静広淵 〔三〕37 〔四十〕1 2
ナ 中島広行 〔二十七〕〔四十〕3 4 34 35
長瀬真幸 〔三〕18 30 42 〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕
〔八〕〔九〕〔十〕〔十一〕〔十二〕
〔十三〕〔十四〕〔十五〕〔十六〕〔十七〕
〔十八〕〔十九〕〔二十〕〔三十二〕
〔二十三〕
長瀬正克 〔四十〕20 21 22 23 30 31
名村某 〔三〕22 〔四十〕5 14 15 16 17 19 20 21 22 23 24 25
楢林公足 27 28 30 31 32 33 34
〔四十〕13
南桂 〔四〕〔八〕〔十二〕〔十三〕〔十八〕
〔二十〕〔二十四〕〔二十九〕〔三十〕
〔三十一〕
二 西田秋実 〔四十〕9 14 15 17 27
西紀麿 〔四十〕10 14 15 24 25
西村気風 〔三十七〕
野中古水 〔三〕43 45
ノ 一柳千古 〔三十四〕
ヒ 平田篤胤 〔四十〕6
福済寺 〔四十〕13
フ 藤木屋 〔三〕13
藤崎宮 〔十五〕
藤村光鎮 〔四十〕15
二葉屋 〔三〕45
古人

ホ 本間素当 〔三〕6 10 14 24 25 28 29 36 41 45 〔二十四〕
マ 松本富久 〔四十〕35
ミ 峯斎 〔三十七〕
みす子 〔三〕23 〔四十〕5 16 17 18 28
明円寺 〔三〕12
モ 本居大平 〔一〕〔二〕
ヤ 山本三春 〔三十二〕
ヨ 横田敬正 〔三〕35
吉永直雄 〔三〕4 47 〔二十六〕〔四十〕3
吉永秀雅 〔三〕5 49
代継宮 〔三〕47
ラ 来照寺 〔四十〕36
リ 陸品三 〔四十〕21
ワ 若杉某 〔四十〕29
和田敬足 〔三〕1 15 21 31 34 48 〔二十二〕
和田亭 〔三〕19

——文部省教科書調査官——